



No. 10

公益財団法人東洋哲学研究所

NEWSLETTER



公益財団法人東洋哲学研究所

〒192-0003 東京都八王子市丹木町 1-236

Tel: 042 (691) 6591 Fax: 042 (691) 6588

日本語サイト: <https://www.totetu.org/>

英語サイト: <https://www.totetu.org/en/>

Instagram: @totetsu_iop_official

目次

研究所紹介	2
新代表理事・所長挨拶	3
【追悼企画】創立者・池田大作先生と東洋哲学研究所	4-6
【追悼寄稿】	7-12
News	13
第37回学術大会	14-15
【特集】「法華経写本シリーズ」	16-19
「法華経—平和と共生のメッセージ」展	20-21
連続公開講演会	22-23
研究活動	24-25
出版物	26
定期刊行物	27-29

「IOP NEWSLETTER」No.10では、公益財団法人東洋哲学研究所が2023年4月から2024年3月に推進してきた研究活動のトピックスを紹介します。

※所属、肩書、講演会タイトル等は当時のものです

研究所紹介

創 立 者：池田 大作 創価学会インタナショナル会長
代表理事・所長：田中 亮平（2024年4月1日就任）

【沿革】

1962年（昭和37年）1月27日 開所
1965年（昭和40年）12月3日 財団法人設立
2010年（平成22年）11月18日 公益財団法人認定

【設立趣旨】

東洋思想、なかんずく仏教のすぐれた思想・哲学を研究するとともに、各学問分野との学際的研究を推進。その成果をもって、人類が抱える諸課題の克服に貢献する。

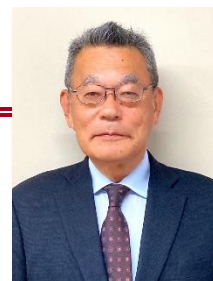
【所在地】

〒192-0003 東京都八王子市丹木町 1-236
TEL：042-691-6591 / FAX：042-691-6588
開館：月曜日から金曜日（午前10時～午後5時）



新代表理事・所長挨拶

田中亮平



東洋哲学研究所は創立者・池田大作先生の創立構想から本年2月で63年を迎えました。来るべき構想70周年をめざし、これまで着実に生み出されてきた成果を、さらに継承発展させゆくために尽力して参りたいと思います。そのためにここで、構想時点で示された当研究所の原点をもう一度確認してみます。

創立者が研究所に示された“原点”とは、第一に数千年の長きにわたって、東アジアの民衆の精神を潤してきた「法華経」の研究を深めることです。「法華経とシルクロード」展（1998年）では、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所が所蔵する、法華経をはじめ重要経典の写本を公開し、日本と欧州の仏教研究者より多くの称賛の声をいただきました。またこれに続く「法華経——平和と共生のメッセージ」展は、香港からスタートし、日本をはじめアジア・欧州・南米などの世界17カ国・地域で開催され、100万人に迫る人々に法華経の叡智の光を送ってきました。さらに、世界各地の公文書館等が所蔵する各種法華経原典の研究・解説も進め、その成果は「法華経写本シリーズ」として、『ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵 梵文法華経写本（SI P/5 他）——写真版』をはじめ、全20点の刊行となって結実しました。

第二の“原点”は、仏教の思想と他の宗教、思想、科学との比較研究を進めることです。これまでハーバード大学・世界宗教研究センター、中国社会科学院世界宗教研究所をはじめ世界各地の大学・研究機関との共同シンポジウムを実施し、さらに敦煌研究院、マラヤ大学文明間対話センター等と学術交流協定を締結してきました。各研究員も世界中の大学・研究所、各種学会で研究成果を発表しています。

第三の“原点”は、人類的課題を解決するための、仏教を基調とした人間主義、平和主義の理論を構築することです。学術大会では、生命尊厳の思想を出発点として、現代の課題をテーマにその解決に向けて議論を重ねています。また、機関誌『東洋学術研究』『東洋哲学研究所紀要』の出版事業などを通じた活動はもとより、連続公開講演会の開催など、研究成果の発信にも力を入れています。

東洋哲学研究所は、創立者の精神を基盤として、21世紀の“平和の文化”の創出のために、研究所員一同不断の努力を続けていきたいと考えています。

創立者・池田大作先生と東洋哲学研究所

In memory of Daisaku Ikeda, Founder of the Institute of Oriental Philosophy



© Seikyo Shimbun

本号では、2023年11月15日に95歳で逝去された東洋哲学研究所創立者である池田大作先生を追悼し、東洋哲学研究所との関わりとその学術的業績を偲ぶ特別企画を組むこととした。池田先生は、宗教指導者、平和運動家、教育者としての活動だけでなく、学術分野においても、長年に渡って寄稿や提言、講演等を行ってきた。その発信は、国内外の研究者や機関、また一般にも多大な影響を与えてきた。本企画では、池田先生と東洋哲学研究所の歩みを振り返りつつ、その業績を掲載する。そして、中国・敦煌研究院の趙声良党委書記（前院長）、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所のイリーナ・ポポワ所長、東洋哲学研究所の桐ヶ谷章顧問（前所長）の追悼寄稿を収録する。

【略歴】

1928年1月2日、東京生まれ。富士短期大学（現・東京富士大学）卒。1947年、19歳で創価学会に入会。戸田城聖理事長（後の第2代会長）に師事する。1960年、32歳で第3代会長に就任。創価学会の飛躍的な発展をもたらす。1979年、名誉会長に就任。1975年から、SGI（創価学会インターナショナル）会長。「仏法を基調とした平和・文化・教育運動」を提唱・推進し、世界54カ国・地域を訪問。ハーバード大学、モスクワ大学、フランス学士院その他、世界の知性の府で講演を重ねてきた。また1983年（昭和58年）から、「SGIの日」である1月26日に記念提言を40回にわたり発表。「環境国連」や「核廃絶のための特別総会」の開催などの具体的提案を行ってきた。社会主義国との友好・対話にも力を入れ、1968年には「日中国交正常化提言」を発表。自らも10回、訪中している。また旧ソ連、東欧、キューバも訪れて、そこに生きる民衆の平和希求の声を世界に紹介してきた。

さらに、東洋哲学研究所・戸田記念国際平和研究所、創価大学・創価女子短期大学・アメリカ創価大学・創価学園、民主音楽協会、東京富士美術館、ユゴー文学記念館、アマゾン自然環境研究センターなど学術・教育・芸術・環境保護の諸団体を創立。桂冠詩人であり、小説『人間革命』（全12巻）、『新・人間革命』（全30巻）など著書多数。歴史学者アーノルド・トインビーとの対談集『21世紀への対話』をはじめ世界の識者・指導者との対談集を精力的に編み続けてきた。

こうした行動に対して、「国連平和賞」「人道賞」（国連難民高等弁務官事務所から）などが贈られている。また「ブラジル南十字国家勲章」「フランス共和国芸術・文学勲章」など28の国家勲章、800の名誉市民（名誉国民、名誉州民、名誉県民なども含む）称号が贈られている。さらに、モスクワ大学、北京大学、ジョージ・メイソン大学、グラスゴー大学、ポロニヤ大学、デリー大学、インドネシア大学、マラヤ大学、香港大学、フィリピン大学、アンカラ大学、ナイロビ大学、サンパウロ総合大学などの大学・学術機関から409の名誉博士号・名誉教授の称号等を受けている。

東洋哲学研究所の歩み

創立者・池田大作先生は、「思想は、誤れば大変な悲劇をもたらす」と警鐘を鳴らす一方で、「遅かれ早かれ、世界を支配するものは思想である」との信念のもと、東洋の叡智を現代に活かす道を切り拓かれた。その先生の遺志を受け継ぎ、平和と共生の哲学を探究してきたのが、東洋哲学研究所である。

池田先生は、研究所の学術誌『東洋学術研究』に数多くの論考を発表されてきた。その内容は実に多岐にわたる。1962年の創刊号に寄せられた「創刊を祝す」から始まり、「科学文明と宗教」「人間と環境の哲学」といった現代社会の根源的問題を論じたもの、「スコラ哲学と現代文明」など東西の哲学・思想を比較考察したもの、「仏法—西と東」「鳩摩羅什を語る」など仏教思想の本質に迫ったものがある。そして「環境問題と仏教」などの東洋の智慧を通して現代の諸課題の解決を模索する論考も多数ある。



インド文化国際アカデミーのロケッシュ・チャンドラ博士と語り合う池田先生。席上、同アカデミーの「最高名誉会員証」が贈られた（1998年11月、東京で） © Seikyo Shimbun

さらに注目すべきは、池田先生が「法華経写本シリーズ」の刊行にあたって寄せられた一連の論考である。そこには写本研究を通して法華経の思想を現代に蘇らせ、人類の指針とせんとする強い意欲が感じられる。また、東洋哲学研究所が企画・製作する「法華経——平和と共生のメッセージ」展には、法華経の平和思想を世界へという決意を呼びかけた。北京大学池田大作研究会でのシンポジウムをはじめ、ロシア科学アカデミー東洋学研究所、中国社会科学院世界宗教研究所、ブラジル哲学アカデミーなどとの共同シンポジウムには基軸となるメッセージを送った。何より、東西の学者との対談・てい談が『東洋学術研究』に連載されたことによって、「東洋の智慧」を基盤とした「対話と平和の文化」の構築が先生によって具体的に発信されてきた。

こうした池田先生の歩みを振り返るとき、東洋の叡智を現代に活かし、世界の平和と人類の幸福に貢献しようとする先生の崇高な精神が、研究所の学術・文化活動の根底を一貫して流れていることがわかる。東洋哲学研究所の研究所員は、「世界の東哲」の名にふさわしい研究と実践を重ねることで、先生の遺志を継承していく決意である。そして、東洋の英知によって人間性の復興と世界平和の実現に貢献すること——それこそが、池田先生から託された東洋哲学研究所の使命と確信している。

創立者・池田大作先生と東洋哲学研究所

In memory of Daisaku Ikeda, Founder of the Institute of Oriental Philosophy

『東洋学術研究』への寄稿一覧

『東洋学術研究』 (通巻)	発行年	分類	タイトル/シンポジウム等
1	1962.11	寄稿	創刊を祝す
6	1964.5	論文	科学文明と宗教
51	1970.10	論説	人間と環境の哲学
62	1973.8	講演	スコラ哲学と現代文明
64-75	1974.1-1975.11	対談	仏法-西と東①-⑫
78-80, 82-88	1976.5-1976.9 1977.1-1978.1	てい談	仏教思想の源流①-⑩
104-108	1983.5-1985.5	インタビュー	鳩摩羅什を語る①-⑤
113,114,116	1987.11-1988.11	寄稿	脳死問題に関する一考察 日蓮大聖人の仏法の視座から①-③
121	1990.2	寄稿	環境問題と仏教
138	1997.5	【法華経写本シリーズ】 巻頭の辞	『旅順博物館所蔵 梵文法華経断簡——写真版及びローマ字版』
140-143	1998.5-1999.11	対談	美しき獅子の魂①-④
142	1999.5	【法華経写本シリーズ】 巻頭の辞	『ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華経写本 (No. 4-21) ——写真版』
145-148	2000.11-2002.6	てい談	東洋の智慧を語る①-④
148	2002.6	【法華経写本シリーズ】 発刊の辞	『ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華経写本 (Add.1682およびAdd.1683) ——写真版』
149-151	2002.12-2004.6	対談	インドの精神——仏教とヒンズー教①-③
151	2003.12	メッセージ	国立ガンジー博物館・インド創価学会との共同シンポジウム
153-156	2004.12-2006.6	対談	人間主義の旗を——人間性・慈悲・寛容①-④
153	2004.12	メッセージ	北京大学池田大作研究会との共同シンポジウム
153	2004.12	寄稿	第37回国際アジア・北アフリカ研究会議 (ICANAS)
154	2005.7	【法華経写本シリーズ】 発刊の辞	『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵 西夏文「妙法蓮華経」写真版 (鳩摩羅什訳対照)』
156-160	2006.12-2008.5	対談	人権の世紀へのメッセージ——“第三の千年”に何が必要か①-④
157	2006.12	メッセージ	ロシア科学アカデミー東洋学研究所との共同シンポジウム
158	2007.5	メッセージ	香港中文大学中国哲学・文化研究センターとの共同シンポジウム
159	2007.11	メッセージ	世界詩歌協会との共同シンポジウム
160	2008.5	【法華経展】 メッセージ	インドでの「法華経——平和と共生のメッセージ」展
161	2008.11	序文	ボストン21世紀センターの論文集に寄せた池田SGI会長の序文集
162-168	2009.5-2012.5	対談	平和の架け橋——人間教育を語る①-⑦
162	2009.5	インタビュー	アメリカ仏教専門誌「トライシクル」での池田SGI会長のインタビュー「人間革命の信仰」
163	2009.12	【法華経展】 メッセージ	スペインでの「法華経——平和と共生のメッセージ」展
164	2010.5	メッセージ	中国社会科学院世界宗教研究所との共同シンポジウム
166	2011.5	メッセージ	ブラジル哲学アカデミーとの共同シンポジウム
167	2011.11	メッセージ	東洋哲学研究所創立構想50周年記念インド・シンポジウム
168	2012.5	メッセージ	エレナ・イヴァン・ドゥイチェフ博士記念スラヴ・ビザンティン研究所との共同シンポジウム
169	2012.11	メッセージ	東洋哲学研究所創立50周年記念シンポジウム
171-172	2013.12-2014.5	対談	地球革命への挑戦——人間と環境を語る①-②
171	2013.12	【法華経写本シリーズ】 発刊の辞	『ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵 梵文法華経写本 (SI P/5他) ——写真版』
178-179	2017.5-2017.11	対談	大いなる人間復興への目覚め①②
182	2019.5	メッセージ	敦煌研究院との共同シンポジウム
187	2021.11	講演	スコラ哲学と現代文明 ※再掲



池田大作先生と敦煌

趙声良

敦煌研究院 党委書記（前院長）

池田大作先生ならびに氏の率いる創価学会は、長年にわたって世界の文化、教育、そして平和事業の推進に力を注いでこられた。池田先生はまた、中日友好の平和の使者でもあられ、幾多にも及ぶ中国訪問期間中において、殊に敦煌文化遺産の保護及び研究に関心を注がれると共に、敦煌研究院の文化遺産の保護研究を支持して下さった。

1980年に池田先生が中国を訪問された折には、北京で敦煌文物研究所（現、敦煌研究院）の常書鴻所長と会見して友好談話を交わし、シルクロードの歴史から仏教文化ならびに敦煌の石窟芸術等に至るまでの見解を交換された。池田先生は敦煌の芸術に多大なる興味を示すと同時に、常先生が敦煌石窟の保護に献身した事に対しても敬服の念を示され、爾後池田先生は何度も常先生と膝を交え、人類の発展、世界の平和、仏教の社会に対する責任等といった面に対して多くの共通する考えを懐いておられた。池田先生は、「新しい世紀へつづく『精神のシルクロード』には、美しい芸術を花咲かせた『大きく（敦）輝く（煌）』敦煌のような平和の砦が、各地に数限りなく誕生していくことを祈りたい」と述べている（1）。両者の対談の内容は後に『敦煌の光彩：池田大作与常書鴻対談、書信録』としてまとめられ、出版されている（中国社会科学出版社、1991年）。

1982年の敦煌研究院の第二代院長段文傑先生の訪日期間中、池田先生は段先生と会見され、1984年6月の池田先生の第6次訪中の折、段先生はわざわざ池田先生を北京に訪ね、双方は翌年に東京富士美術館で開催される芸術展についての打ち合わせを行った。

1985年10月、『中国敦煌展』が富士美術館で開催した。それには113点の作品が展示され、内容は敦煌研究院所蔵の敦煌蔵経洞出土『妙法蓮華経』の写本36点、莫高窟『妙法蓮華経変』をはじめとするタイトル壁画の臨本21点及び敦煌域内出土の文物56点を含むものであった。この大規模な敦煌展は多くの観衆を魅了し、日本に熱烈な反響を呼ぶことで、中日友好文化交流の促進に積極的な役割を果たした。また、創価学会は敦煌研究院に車両や研究機材を寄贈し、敦煌の保護研究作業を援助された。

1990年、段先生は訪日期間中の12月28日に東京の聖教新聞社で再び池田先生と会い、両者は敦煌芸術について膝を交え、古代の敦煌芸術から現代の発展に至るまで語り合っている。そのテーマの一つは、敦煌と一般民衆との関係で、段先生が敦煌芸術は古代の無名の絵師によって創造されたもので、敦煌壁画の多くは当時の民衆の生活を反映したものであると言及すると、池田先生は「敦煌は、仏教を根本に、民衆が創造し、民衆が享受し、そして民衆が守った『文化の城』であり『平和の城』なのです」と讃嘆された（2）。その折の対談の全文は1990年12月29日付『聖教新聞』に掲載されている。その間、段先生に「東京富士美術館最高栄誉賞」が授与されている。

21世紀に入って以来、敦煌研究院と創価学会との交流は途絶える事なく、2012年に東洋哲学研究所の招きを受け、樊錦詩院長が神戸を訪れ「法華経——平和と共生のメッセージ」展（法華経展）の開幕式に出席すると共に、学術

追悼寄稿

報告を行った。その間、更に東京の東洋哲学研究所を訪れると共に、創価学会会長の原田稔氏と会談している。爾後、敦煌研究院と東洋哲学研究所は「法華経展」を共同開催し、相前後してシンガポール、韓国等の国で展示を行い、敦煌研究院の研究者である張元林氏も展覧会の開催に合わせて学術講座を行っている。

2018年9月、敦煌研究院と東洋哲学研究所は敦煌において「敦煌と法華経」学術シンポジウムを共同主催した。池田先生はわざわざ同シンポジウムに祝賀メッセージを送り、その中で池田先生と常先生ならびに段先生との素晴らしい思い出に言及されると共に、同シンポジウムが

中日両国の平和友好関係の増進に繋がるよう願われた。池田先生はそのメッセージの中で、更にこう述べておられる。「シルクロード文化の集積地として、多様な民族や人種が交流した敦煌が、今まで以上に世界の民衆に“美の光彩、を放ち、生命の活力を贈りゆくかけがえのない“精神のオアシス、として、人々に平和と共生と人道のメッセージを発信し続けていくことを強く確信してやみません」と(3)。

この学術シンポジウムは多大な成果を収め、『敦煌研究』誌及び『東洋学術研究』誌にそれぞれ中国語と日本語で同シンポジウムの論文6篇が掲載された。会議後、双方は学術交流協定を締結し、敦煌研究院と東洋哲学研究所との学術交流及び共同研究は今日に至るまで続いている。

40数年にわたる池田大作先生と創価学会の敦煌文物の保護事業に対する援助と支持を回顧するに、私どもは池田先生の仏教文化に対する深い認識、ならびに人類の文化遺産を重要視する姿勢を実感せずにはいられない。先生は宗教文化活動を通じて人類文明の進歩を促し、世界平和を推進されると共に、その為に畢生の精力を捧げられたのである！そして、池田先生の精神は、文化遺産の科学的保護及び学術研究を更に一步推進し、人類の平和ならびに文化交流・共生を促進するよう絶えず私どもを鼓舞し続けるに相違ない。

注(1) 常書鴻／池田大作『敦煌の光彩——美と人生を語る』徳間書店、1990年、8頁。

(2) 池田大作／段文傑「名誉会長、中国・敦煌研究院の段文傑院長と会談」『聖教新聞』1990年12月29日付。

(3) 池田大作「メッセージ」『東洋学術研究』第58巻第1号、8頁。



敦煌研究院名誉院長の常書鴻氏と会見する池田先生（1990年6月、中国・北京で）。同研究院からは1992年、先生に「名誉研究員」の称号が贈られている © Seikyo Shimbun



池田大作先生の生涯を偲んで

イリーナ・F・ポポワ

ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所 所長

2023年11月15日に池田大作先生（創価学会インタナショナル会長）が逝去されました。近代仏教哲学者、思想家、そして世界中の人々に多大な影響を与えた国際人でありました。

池田先生と直接会う機会に恵まれた私の知人は皆、先生の寛大さ、心遣いや思いやりの深さに感銘を受けていました。池田先生はその生涯を通して、辛抱強く異なる国の人々の共通項を見つけ出し、教育、内面、伝統や価値観の違いをすべて乗り越え、手を携え、結びつけようとしました。先生の考えは法華経と13世紀の仏教の聖者・日蓮の教えに基づいていたのです。我々、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所（旧・ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部）と東洋哲学研究所との間の長い、実り豊かな関係は、ユニークな法華経の写本を、学者に限らず関心を持つすべての方々に広く知らせることを共有の目的としてきました。

ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所と貴研究所の学術交流協定は、1996年11月30日に締結されました。当時のユーリ・A・ペトロシヤン所長（1930—2010）、エヴゲーニイ・I・クチャーノフ副所長（1932—2013）、そしてマルガリータ・I・ヴォロビョヴァ＝デシャトフスカヤ写本室主事（1933—2021）らは、訪日した際に池田先生とお会いすることができました。そしてその年、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所の学術会議が満場一致で、池田先生を名誉会員としてお迎えすることを決定したのです。

ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所と貴研究所の初めての共同プロジェクトは1998年11月、東京・新宿の戸田記念国際会館での「法華経とシルクロード」展の共催でした。ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所は所蔵する14言語に及ぶ47点の写本と木版画本を出展しました。仏教文化、古文書や中央アジアに造詣の深い多くの方が来場し、展示は大成功でした。大衆の注目を引いた大きな理由に、かの有名な「ペトロフスキー写本」が含まれていたことは間違いありません。

この展示会には西夏文の写本が出展されました。その理由はいくつかありました。一つは写本自身の独特さでありますが、もう一つは露日の共同研鑽と文化的結びつきの深い歴史的意義があるためです。日本で初めて西夏文字や西夏語の研究を行った石濱純太郎（1888—1968）とロシアの偉大な研究者ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキー（1892—1937）は、長年にわたって共同で研究を行ってきました。

ネフスキーは1915年から日本に滞在し、日本の学者たちと交流をしてきました。そして共同で日本の学術誌に論文を投稿し、柳田國男（1875—1962）と折口信夫（1887—1953）が主催した郷土会にも参加していました。1929年、西夏文研鑽のためネフスキーはロシアに帰国し、8年間研究を続けましたが、1937年に政府に逮捕、処刑されたのです。しかし、ネフスキーが手掛けた研究は、1963年に優れた西夏研究者・中国学者である中央アジアの歴史学者のエヴゲーニイ・クチャーノフを筆頭とする東洋学研究所レニングラード支部西夏学部門が引き継ぎました。そして、クチャーノフは石濱純

追悼寄稿

太郎の弟子、日本の西夏学者の第一人者、西田龍雄（1928—2012）との共同研究を何年も続けたのです。

1998年の「法華経とシルクロード」展の開催のため、ロシアと日本の研究者によって日本語及び英語のカタログ『「法華経とシルクロード」展：東洋学研究所（サンクトペテルブルク）所蔵の仏教文献遺産』を出版することができました。

2005年にはロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵の西夏文法華経の写本を貴研究所が西田龍雄の編集によって、写本シリーズ6『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵西夏文「妙法蓮華経」写真版（鳩摩羅什訳対照



現在の法華経展の前身となる「法華経とシルクロード」展を訪れた池田先生。ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所の尽力により、門外不出の写本などが出展された（1998年11月、東京で） © Seikyo Shimbun

<Tang218』として、カラーで出版。さらに2013年にはペトロフスキー写本をシリーズ13『ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵梵文法華経写本（SI P/5他）——写真版』として出版されました。これは以前、ロシアではセルゲイ・フョードロヴィチ・オルデンプルク（1863—1934）、ウラジーミル・スヴァトスラエオヴィチ・ヴォロビヨフ＝デシャトフスキー（1927—1956）やマルガリータ・I・ヴォロビヨヴァ＝デシャトフスカヤによって研究されたもので、この写本は独特な特徴を備えており、出版後、瞬く間に世界の学者の注目を浴びるようになりました。

1950年代、ウラジーミル・スヴァトスラエオヴィチ・ヴォロビヨフ＝デシャトフスキーは、ペトロフスキー写本を含むセリンディア・コレクションの文物を研究していました。その妻であるマルガリータ・I・ヴォロビヨヴァ＝デシャトフスカヤがこの仕事を続け、コレクションのインド語の断片を中心に研究を進めました。氏の努力とともにG・M・ボンガルド＝レヴィン（1931—2009）とE・N・チヨムキン（1928—2019）の貢献により、1985年に梵文法華経写本（SI P/5他）の一部が『中央アジア出土のインド語文献の記念碑』に写真版、ローマ字テキストと解説付きで掲載されたのです。

ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所と貴研究所が共催したもう一つの意義深いイベントとして、フランス創価文化協会と共催した「仏教経典：世界の精神遺産——写本と図像で知る法華経」展が挙げられます。この展示会は、パリのユネスコ本部で2016年の4月2日から10日に行われ、中央アジア出土のオリジナル文物を27点出展しました。そして展示会の開催に合わせてカタログを出版し、その中にはサンクトペテルブルクや他の世界的に有名なコレクションから出展されたものの複製も含まれました。

ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所と貴研究所が、共同での研究を長期にわたり続けてこられたのは、池田大作先生が交流の架け橋を築いて下さったことと、そのビジョンのおかげです。貴研究所から贈られた日本仏教の歴史に関する書物は、露日両国の相互理解に多大なる成果を為しています。そして、その多くの書物の著者は池田先生であります。池田先生の考えに触れ、私たちは、「どのように平和と安穩を創造していけばよいか」、そして「人間はどうしたら、より自分らしさを発揮できるか」などの多くの手がかりを池田先生から頂戴したのです。



創立者と共に「世界の東哲」へ

桐ヶ谷章

東洋哲学研究所 顧問（前所長）

2023年11月18日、東洋哲学研究所（以下、「東哲」と略称する場合もある）の創立者・池田大作先生が、同月15日にご逝去されたとの報が届きました。私たち研究所員一同は、創立者の逝去という現実、驚きと悲しみに包まれました。創立者からいただいた、数多くのご指導とご慈愛に、深く報恩・感謝申し上げ、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

そのご鴻恩に報いるためには、創立から今日に至るまで創立者が魂魄をとどめられた東洋哲学研究所の一員であるとの誇りと自負を胸に、創立の精神を脈動させながら研究・活動に邁進し、創立者の事績を承継・発展させていくこと以外にないということを、所員一同改めて確認・決意いたしました。

東洋哲学研究所は、1961年2月4日、創価学会第三代会長就任間もない池田先生が、仏教発祥の地インド・ブッダガヤを初訪問された折、学問的英知の光によって仏教の真髓と普遍的価値を明らかにすることを目的として構想され、翌62年1月27日に創立されました。その眼目は、法華経を中心に研究を重ね、仏法の人間主義、平和主義を世界に展開していける人材をはぐくむことであります。

池田先生は、研究所の創立以来、折に触れ、研究所ならびに所員の在り方について様々な指針を示されるとともに、研究所等を舞台に、研究所員の在り方等を自らのお振る舞いによって示してくださいました。先生は、世界的文明史家であるアーノルド・トインビー博士との対談（1972年）を皮切りに、全世界の指導者・識者等と文字通り対話の旋風を巻き起こされました。その数は実に7000人を超え、すでに80点の対談集が発刊されております。また、カリフォルニア大学ロサンゼルス校に始まり、モスクワ大学、ハーバード大学等の海外の名だたる諸大学・学術機関から要請を受け、30余の講演を行われてきました。その対談と講演のテーマは多岐・多分野にわたり、その内容は、広く一般にも共有され、混迷する時代の明確な指針となってきております。このようなご事績・ご活躍により、全世界の大学、研究・学術機関から、400を超える名誉学術称号を授与されております。

池田先生はまた、1983年から、「SGI（創価学会インターナショナル）の日」を記念した平和提言を発表されてきました。第一回提言発表当時も、紛争や経済情勢の悪化などから、「海図なき時代、先が読めない時代」であり、時代はまさに「巨大なカオス」状態でした。このような状況を目の当たりにして、先生は、「仏法者としての社会的、人間的使命、やむにやまれぬ心情」に駆られ「『平和と軍縮』の側面からいくつかの提言を試みた」と述べられ、その後も、「平和」「教育」「環境」に関する数多くの提言を発信されております。

東洋哲学研究所が最初に発刊した学術誌『東洋学術研究』の第一号に、池田先生は「創刊を祝す」と題した寄稿を執筆され、当研究所が他の研究所と比較して優れている点を三点にわたって示されました。その一つとして、「この研究所の活動は、他の研究所と違い常に大衆に直結されて、少しも遊離することがない」（1）という点を示してくださいまし

追悼寄稿

た。そして「他では、限られた一部の階層にのみ関係をもつような研究所が多く、大衆からは一向にその研究内容が分からない存在となっているが、果して正しい在り方というのであろうか。わが研究所はこの孤立した行き方を避け、広く内外にその成果を絶えず公開して大衆と共に存在するのである」(2)と展開されています。世の潮流を形成するのは、指導者や一部知識人に依る部分もありますが、その大勢は一般大衆であると思います。当研究所の在り方を極めて的確に示していただいた指針です。

当研究所では、研究・活動の成果を『東洋学術研究』、『The Journal of Oriental Studies』、『東洋哲学研究所紀要』等で着実に発信するとともに、各分野をリードする研究者を数多く招待し、文明間対話シンポジウムや公開講演会等を開催してきました。特に公開講演会はオンラインでの実施とも相まって、日本全国はもとより、海外からの視聴も容易になり、年間の累計受講者が3000人を超えるようになって、私たちの研究成果をより広く発信するまでとなりました。そして、池田先生のご提案をいただいて実現した「法華経写本シリーズ」は、2023年11月に、「梵文法華経写本(C4)校訂本」を上梓するに至り、世界の学術者の法華経研究に多大に資するのみならず、広く一般大衆に法華経の原典に迫る研究を公開してきました。また、その延長線上で企画された「法華経——平和と共生のメッセージ」展は、世界17カ国・地域で開催し、実に100万人に迫る人々が鑑賞に訪れ、思想・宗教も異なる多くの人々に、法華経に内在する深遠な哲学に触れる機会を提供してきました。それは先生が警鐘を鳴らしてきた象牙の塔の研究機関を脱却し、「世界益」「人類益」を志向する当研究所の存在意義を示そうとしてきた歩みと言えると思います。

こうした研究・活動を耳にされた池田先生は2018年、創立構想の日である2月4日を祝す「東洋哲学研究所の日」にあたって、私たち研究所員に、「法華経展を通して『世界の東哲』になったね」と激励・指導してくださいました。それは先生が改めて、私たちの研究・活動が世界的広がりや影響力をもつものであるということとともに、そのためにはどこまでも大衆から離れることなく、大衆に力を与えるものでなければならないことを、強く深く望まれている証であったと確信しております。

これらのご指導の集大成として、2021年の創立構想60周年を記念する集いに際し、池田先生から次の三項目にわたる「東洋哲学研究所モットー」をいただきました。

- 一、「生命尊厳」の哲学を時代の潮流に！
- 一、叡智の結集で「世界市民の連帯」に貢献！
- 一、「世界の東哲」として平和の地球文明を創出！

さらに、2022年の創立60周年を記念する集いに際しては、私たちの行動指針として、「不軽菩薩のごとく勇敢に誠実に人間尊敬の行動を貫きながら、普賢菩薩のごとく普く賢く生命尊厳の中道の叡智を、社会に、世界に、未来に広げていってください」と激励してくださいました。世界は、紛争や災害が、今も絶え間なく続いております。創立者・池田先生が強く願われていた、災害や戦争のない世界を実現するためにも、私たち研究所員一同は、先生が遺されたご指針とご遺志を、永遠に高らかに掲げ、先生のお振る舞いを範としながら、東哲創立70周年を目指し、いよいよの決意をもって研究・活動に励み、ご鴻恩に報いてまいります。

注(1) 池田大作「創刊を祝す」『東洋学術研究』第1巻第1号、3頁。(2) 同書、3—4頁。

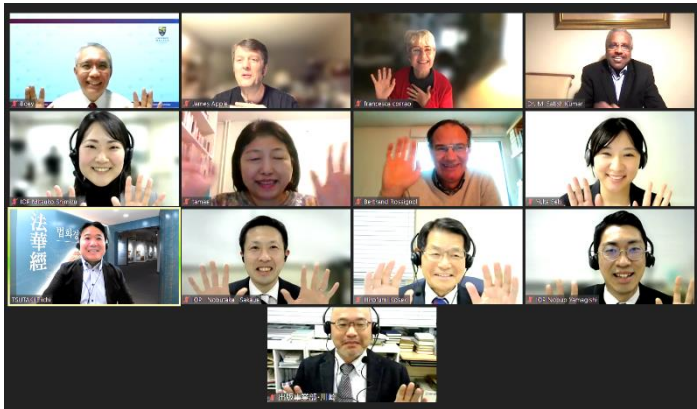
マレーシアの学術機関と交流

東洋哲学研究所の訪問団が2024年3月、マレーシア国際イスラム大学国際イスラム思想・文明研究所（写真上、3月5日）と、学術交流協定を締結しているマラヤ大学文明間対話センター（同下、3月4日）を表敬訪問した。

両機関とは、東哲が進めている文明間・宗教間対話の研究活動の推進について、今後の交流などについての懇談を行った。



海外研究員による研究報告会



「2・4 東洋哲学研究所の日」を記念した海外研究員による研究報告会が、2024年1月31日に行われた（写真）。

これには、イギリス、イタリア、フランス、カナダ、マレーシアの海外研究員が参加し、これまでの研究活動の報告と今後の打ち合わせを行った。

海外からの来研者

東洋哲学研究所には2023年度に、海外4カ国の研究者が来研。創立者の理念や、今後の交流などについて、有意義な意見交換を行っている。

6月27日 ノルウェー Asle Toje（ノルウェー・ノーベル委員会副委員長）

アメリカ Alexander Harang（アメリカ創価大学特別客員教授）

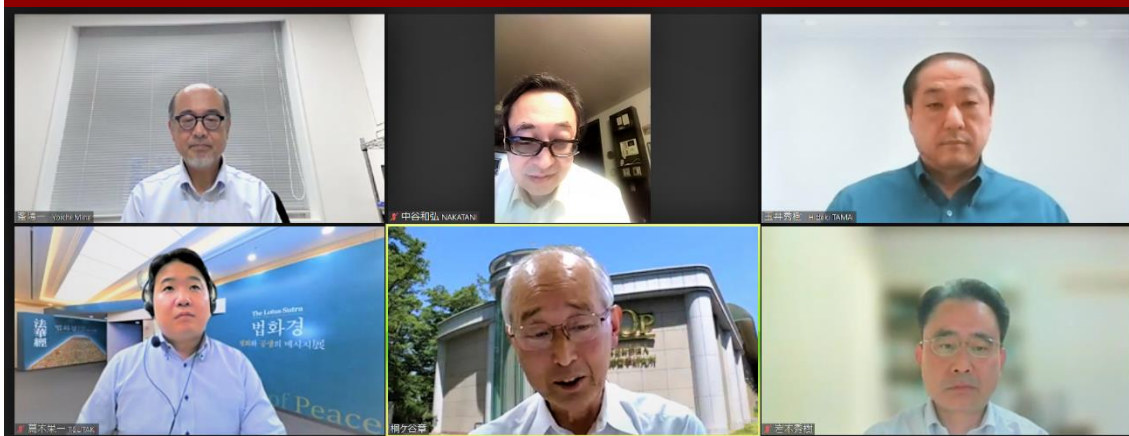
9月20日 中国 催学森（大連外国語大学日本語学院教授、同大学池田大作研究所所長）

10月17日 韓国 趙誠倫（済州大学名誉教授）

第 37 回学術大会

シンポジウムテーマ

「21 世紀の精神のシルクロード——平和への道筋を考える」



上段左から、同志社大学教授の峯陽一氏、東京大学大学院教授の中谷和弘氏、東洋哲学研究所委嘱研究員の玉井秀樹氏。下段左から、同研究所の委嘱研究員で司会の蔦木栄一氏、所長の桐ヶ谷章氏、研究員の岩木秀樹氏

第 37 回学術大会が 5 月 27、28 日にオンラインで開催された。研究所の学術大会は、国内外の研究者・委嘱研究者が集い、法華経研究をはじめ宗教間・文明間対話、平和と人権、環境問題などの課題克服の研究成果を発表する機会であり、それぞれの専門・研究分野を踏まえたテーマで発表を行った。

1 日目（5 月 27 日）にはシンポジウム「21 世紀の精神のシルクロード——平和への道筋を考える」をオンライン（登壇者は Zoom、参加者は YouTubeLive 配信にて視聴）で実施。シンポジウムは、創業者・池田大作先生による「SGI の日」記念提言発表 40 周年を記念するもの。第 3 次世界大戦・核戦争の危機を回避し、人類を分断から連帯へと導くことを一貫して発信してきた提言を基に、人類が今、21 世紀のシルクロードたる地理的・文化的・歴史的なつながりを再認識し、共に生き、共に幸福を享受し、共に平和へと歩いていくためには、一体何が必要なのか——こうした問題意識を論じ合うことを目的と

して企画された。このテーマに対して、中谷和弘氏（東京大学大学院教授）と峯陽一氏（同志社大学教授）を招聘し、当研究所の研究員の岩木秀樹氏と委嘱研究員の玉井秀樹氏とともに発表を行った。シンポジウムでは、桐ヶ谷章所長の挨拶の後、それぞれが以下の発表を行った。

●幸福平和学の試み——戦争に抗す福祉的安全保障——（岩木秀樹 研究員）

戦争から福祉への移行が喫緊の課題であるとして、GDP ではなく人間と地球の健康という視点（ウェルビーイング）から捉えることが重要です。創業者は、人は国籍や民族などで区別されるのではなく、一つの命として地球に生まれたと訴えています。現在の戦時下において、創業者が指摘する地球人精神を今こそ吟味しなければならないのです。

●「戦争」を乗り越える人間の創造性——池田 SGI 会長の平和提言に学ぶ

(玉井秀樹 委嘱研究員)

戦争を乗り越える人間の創造性を発信されてきた創立者の平和行動は、その証しとして多数の名誉学術称号に表れています。「人間をどうするべきなのか」という原点に立ち返り、国連を舞台に提言を行い、国際人道法や国際人権法に注目してきた創立者の提言は一貫して、人間性の喪失に向きあうことを論じてきました。現下の国際情勢にあって、自分自身が変化するという勇気を引き出し、イスラエルとパレスチナを和解に導いたノルウェー・チャンネルで見られた紛争当事者の変化は非常に示唆に富む出来事です。対立・紛争を乗り越え、対立をいかに創造的に統御するのかという視点を学んでいく必要があるのです。

●21 世紀の戦争、平和、尊厳 (峯陽一 同志社大学教授)

大切なのは、一人一人の人間に価値があることであり、人間は決して手段ではなく目的であると再確認することです。私たちは、人と人の間に挟まれて、他者との関係性のなかで生きています。このことは、池田 SGI 会長のモスクワ大学講演の内容にも重なります。世界のあらゆる場所で、人々は自分の生を全うできるようになってきていますが、核兵器の存在だけでなく気候変動・新興感染症といった人類の活動によって自然と人間のバランスが大きく崩れ、人類の生存そのものが脅かされています。私たちは、自らが破滅しない世界を目指すことが、人間の安全保障の究極のメッセージです。そして、東洋、グローバルサウスは、国家同士が争うヨーロッパの戦争を乗り越えて、平和の発信者になれるのかどうか問われているのです。

●国際公共財としての国際法と宗教：ロシアのウクライナ侵略への諸国家の対応とビートル海峽危機におけるローマ教皇庁の仲介をめぐって (中谷和弘 東京大学大学院教授)

ウクライナ危機のなかで、日々多数の人の殺傷が生じています。そうした状況で停戦と和平は非常に重要です。それは、両国が渋々でも合意できる内容でなければなりません。不正義の仲介は不十分ではありますが、誰が仲介者として適任かということも非常に重要な問題です。「国際社会における法の支配」を確立することは、安定した国際社会の維持のために不可欠であり、この意味で国際法は国際公共財になっています。そして、ビートル海峽危機におけるローマ教皇庁の仲介が示すように、宗教は国際公共財として機能する重要なソフトパワーであり、今後注目される力の一つです。

研究発表大会 (2 日目、5 月 28 日)

●鳩摩羅什訳経論における固有名詞 (前川健一 研究員)

●自分自身を規範的な社会文化的影響よりも「大我」と認識することの仏教 (フィスカールセン・アネメッテ 委嘱研究員)

●日本の福祉社会における長期的リスクとレジリエンスの視座 (宮城孝 委嘱研究員)

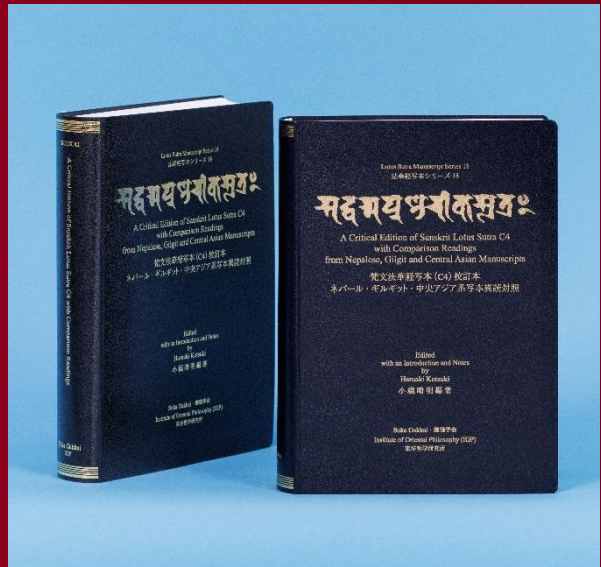
●枢軸時代の宗教発祥と社会の関係の一考察、「自己—社会—環境」この3つの範疇の関係の研究について (その 2) (光國光七郎 委嘱研究員)

●道徳から動徳へ (大久保俊輝 委嘱研究員)

『梵文法華經写本 (C4) 校訂本——ネパール・ギルギット・中央アジア系写本異読対照』が発

刊

『梵文法華經写本 (C4) 校訂本——ネパール・ギルギット・中央アジア系写本異読対照』は、1994年の「法華經写本シリーズ」(非売品)出版委員会発足以来、着実に研究・発刊を重ねてきた同シリーズの到達点とも位置付けられるものである。同シリーズは、これまでに発見されてきた膨大な量の法華經写本を正確に解読・整理し、異同を比較・分類した成果を発信することが目的であった。そうしたなかで今回、「ケンブリッジ大学図書館所蔵梵文法華經写本 Add. 1683」(C4) のローマ字校訂本として発刊をすることができ、C4 テキストと他の主要な写本を対比し、6,200 以上もの異同を各章末の注記 (Notes) に列挙することができた。



このテキストの読みと異なる伝承をもつ中央アジア系のいわゆるカシュガル写本 (略号 Ka) とファルハード・ベグ写本 (略号 F) のローマ字テキストを C4 のテキストと検証比較し、それぞれの違いをサンプルとして、各章末の注記に採録した。さらに、データベースとしての客観性を高めるために、ネパール系写本の源流と考えられるギルギット系写本 4 本 (略号 Ga, Gb, Gc, Gk) と C4 以外のネパール系写本 6 本 (略号 C3, C5, K, N2, Pe, R) ※のテキストも併記した。ギルギット系写本は断片・断簡が多く、それらの書写年は、6 世紀後半以降と考えられている。C3 は、ネパール系の最古の写本 (10 世紀頃) であるが、11 章の後半 (KN 254.2—) 以降は未発見であるので、その失われている箇所は Pe 写本で補充している。

こうした手法は、本シリーズで初めて採用されたものであり、世界のインド学・仏教学の諸賢に、さらに広く思想界、宗教界、および一般の広範な人々に、その評価を問うものであり、梵文法華經の文献学的研究に大きく貢献できるものとする。

梵文法華經の校訂本としては、これまで「ケルン・南條本」(1908 年～12 年刊行)、「荻原・土田本」(34～35 年刊行)、「ダット本」(53 年刊行) などが先人の努力によって出版されてきたが、今回の校訂本が提供する豊富な異読によってさらなる校訂が進み、梵文法華經の研究の進展が期待される。

※C はケンブリッジ大学図書館本、K は東洋文庫河口本、N はネパール国立公文書館本、Pe は北京民族文化宮本、R は英国王立アジア協会本の略



「法華經写本シリーズ」全 18 タイトル 20

法華經など仏教經典は、白樺の樹皮や貝葉（ヤシの一種であるターラ樹の葉）、紙などに書き写した「写本」として、保存・流布された歴史がある。梵語（サンスクリット語）で書かれた現存の法華經写本は、出土した地域や書写された場所によって「ネパール系写本」「ギルギット系写本」「中央アジア系写本」に大別される。中でも「中央アジア系写本」で最大のものは、1893 年にカシュガル駐在のロシア総領事ニコライ・F・ペトロフスキーが入手したもので、「ペトロフスキー本」あるいは「カシュガル本」等と呼ばれている。分量は全体の 80%程度が残っており、法華經研究において重要な位置を占めている。次に「ギルギット系写本」は 1931 年、カシミールのギルギット近郊（現在のパキスタン）の仏塔跡から発見された。「ネパール系写本」の源流である。



「ネパール系写本」は、ネパールおよびチベット由来の比較的新しい写本で、点数も完本も多いので、本格的な写本研究には不可欠のものである。

これらの貴重な写本は、各国の学術機関・図書館などに所蔵されているが、書写されて何百年も経過しているため、全ての資料の公開は実現していない。

1994 年 1 月、創業者・池田大作先生の提案により、写本研究を推進するために創価学会と東哲の共同事業として「法華經写本シリーズ」出版委員会が発足。以来、所蔵機関などの協力を得て、最新の写真・印刷技術を駆使して精密なカラー写真を印刷した「写真版」と、写本の「読み」をローマ字化した「ローマ字版」の刊行が行われてきた。同シリーズは写真版とローマ字版が合体しているものが 2 点、写真版のみが 5 点、ローマ字版のみが 9 点、校訂本（ローマ字版に異読の注を付けたもの）が 2 点、西夏語が 2 点で合計 20 点となる。





世界各地に散在する 法華経原典写本の全貌が明らかに

松田和信

佛教大学 名誉教授

このたび、創価学会と公益財団法人・東洋哲学研究所より『梵文法華経写本（C4）校訂本——ネパール・ギルギット・中央アジア系写本異読対照』（ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華経写本 Add.1683 〈C4〉校訂本）が刊行された。本書は、1997 年のシリーズ 1『旅順博物館所蔵 梵文法華経断簡——写真版及びローマ字版』の刊行から始まった「法華経写本シリーズ」18 の最新巻であり、序文を入れて 800 ページを超える大冊である。本書の出版をもって、世界各地に散在する法華経の原典写本の全貌が明らかになった。まずもって、この気の遠くなるような出版事業の元となる法華経写本の解読に携わった方々と、このような巨大な学術的貢献を支えていただいた関係機関に、同じ仏教写本研究の一研究者として感謝したい。

法華経が紀元前後の古代インドに誕生したことは論をまたない。現在では、紀元 1 世紀にさかのぼる般若経や他の大乘経典のガンダーラ語写本が発見されているが、法華経のガンダーラ語写本は未発見であり、原初の法華経が一体どのようなインド語で記されていたかは現在でもはっきりしない。オウギヤシの葉（貝葉）や紙に書かれた法華経のインド語写本は数多く発見されているが、いずれも、散文（長行）部分はインド語の基準となる梵語（サンスクリット語）で、韻文（偈）部分は崩れた梵語で書かれている。

法華経写本は、ギルギット系写本（6 世紀ごろにさかのぼる）やネパール系写本（10 世紀以降に書かれた）と、中央アジア系写本（古いものでは 6 世紀ごろにさかのぼる）に分けられるが、いずれも同じスタイルで書かれている。ただ、個々の写本を見ると、細部にはさまざまなバリエーションが認められる。研究者は、現存する梵語写本に書かれた本文を比較検討し、そこから法華経の原初の姿に迫っていくほかはないのである。

本書には、ケンブリッジ大学図書館が所蔵するネパール系写本（C4）全文のローマ字転写が掲載され、他のギルギット・ネパール系写本と中央アジア系写本の相違点が、それぞれの文章について詳細に注記されている。本書一冊をひもとけば、研究者は現存する法華経写本の重要なバリエーションのほぼ全てを簡単に確認することができるようになったのである。

本書の編著者は東洋哲学研究所委嘱研究員の小槻晴明氏である。法華経写本研究の世界的権威であった故・戸田宏文徳島大学教授の薫陶を受けた氏と、法華経写本シリーズの立ち上げから、それ

に関わるさまざまな仕事に全力を注いでこられた同じく委嘱研究員の水船教義氏を、私に紹介して下さったのは戸田宏文先生であった。今から40年近く前のことである。

私は、専ら梵語やガンダーラ語等のインド語で書かれた仏教写本の解読を主として自分の研究を行ってきたが、今に至るお二人との長い付き合いの中で、法華経についてさまざまなことを学んできた。旧友の一人として本書の出版を大いに喜ぶとともに、本書が法華経の原典研究、ひいては仏教研究の歴史に残り、わが国と世界の仏教研究者に広く受け入れられることを願ってやまない。

「法華経写本シリーズ」一覧（非売品）

- 1 旅順博物館所蔵 梵文法華経断簡 — 写真版及びローマ字版
- 2-1 ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華経写本 (No.4-21) — 写真版
- 2-2 ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華経写本 (No.4-21) — ローマ字版 1
- 2-3 ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華経写本 (No.4-21) — ローマ字版 2
- 3 カーダリク出土 梵文法華経写本断簡
- 4 ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華経写本 (Add.1682 および 1683) — 写真版
- 5 東京大学総合図書館所蔵 梵文法華経写本 (No.414) — ローマ字版
- 6 ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク支部所蔵 西夏文「妙法蓮華経」— 写真版 (鳩摩羅什訳対照)
- 7 英国・アイルランド王立アジア協会所蔵 梵文法華経写本 (No.6) — ローマ字版
- 8 パリ・アジア協会所蔵 梵文法華経写本 (No.2) — ローマ字版
- 9 大英図書館所蔵 梵文法華経写本 (Or.2204) — 写真版
- 10 ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華経写本 (Add.1684) — ローマ字版
- 11 大英図書館所蔵 梵文法華経写本 (Or.2204) — ローマ字版
- 12 インド国立公文書館所蔵 ギルギット法華経写本— 写真版
- 13 ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵 梵文法華経写本 (SI P/5 他) — 写真版
- 14 コルカタ・アジア協会所蔵 梵文法華経写本 (No.4079) — ローマ字版
- 15 ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華経写本 (No. 5-144) — ローマ字版
- 16 プリンストン大学図書館所蔵西夏文妙法蓮華経— 写真版及びテキストの研究
- 17 ギルギット・ネパール系梵文法華経写本校訂本 (C3 校訂本)
- 18 梵文法華経写本 (C4) 校訂本— ネパール・ギルギット・中央アジア系写本異読対照

「法華経——平和と共

「法華経——平和と共生のメッセージ」展は、東洋哲学研究所が企画・制作する展示会で、2006 年からスタートした。同展は、研究所が進める法華経研究の成果を広く公開するとともに、法華経の伝播の歴史と経典の内容を分かり易く紹介するものである。研究所では創業者・池田大作先生の指針のもと、「法華経とシルクロード」展（1998 年～2000 年）、「法華経——世界の精神遺産」展（2003 年～04 年）、「法華経——平和と共生のメッセージ」展（2006 年～現在）を開催。その間、「仏教経典：世界の精神遺産——写本と図像で知る法華経」展（2016 年～現在）等も行ってきた。

法華経展の淵源となった 1998 年開催の「法華経とシルクロード」展では、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所が所蔵する約 10 万点に及ぶコレクションの中から、オリジナルの仏典写本、木版本など 14 言語 47 点が日本初の公開となった。そして、同展を発展・拡充したのが「法華経——平和と共生のメッセージ」展である。ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所、中国・敦煌研究院、インド文化国際アカデミーの全面的な協力により、法華経写本の画像および複製の公開や敦煌莫高窟の再現、仏教文物・各種資料の提供なども行われている。その出品物には、8 世紀書写とされるペトロフスキー法華経写本や 1～2 世紀書写のガンダーラ語の法句経の複製などが含まれる。また、敦煌莫高窟の壁画に描かれた飛天の模写絵や、敦煌文書の法華経（複製）をはじめ、経典書写の際に使用された鉄筆や白樺の樹皮の複製品など、展示全体で約 160 点に及ぶ文物が出展されている。また研究所では、同展を解説した『ガイドブック法華経展——平和と共生のメッセージ』を編纂し、日本語、英語、韓国語、中国語（簡体字・繁体字）の 4 言語で刊行している。

展示会のコンセプトは「目で見える法華経」であり、日本だけでなく、仏教発祥の地であるインド、ネパールやイスラーム文化圏のマレーシア、上座部仏教国のタイなどアジア各地をはじめ、ヨーロッパ、南米で開催。世界 17 カ国・地域で 90 万人以上が鑑賞する展示会となっている。これまで、韓国の李壽成元首相、タイのウィーラ・ロートポッチャナラット文化大臣、香港中文大学終身主任教授の饒宗頤博士、翻訳家のバートン・ワトソン氏など各界を代表する来賓も展示会に訪れている。

さらに展示には、「法華経の多様な写本を拝見しました。これらは、仏教精神への理解を深め、『法華経』のメッセージを世界に広げていく為のこのうえない資料です」（アルゼンチンサルバドル大学東洋学院カルロス・マヌエル・ルア院長）、「仏教の普遍的価値を浮き彫りにし、人類の精神的遺産の一部とする歴史的な展示会です」（インド国立公文書館ムシルル・ハサン館長）等の声が寄せられている。

生のメッセージ」展

展示会の開催国と地域・実施年

1	香港	2006年～2007年、2015年
2	マカオ	2007年
3	インド	2007年、2008年、2009年、2010年
4	スペイン	2009年、2012年
5	ネパール	2010年
6	ブラジル	2010年、2011年
7	スリランカ	2011年、2013年
8	イギリス	2011年
9	日本	2012年、2013年、2014年
10	台湾	2013年、2015年
11	マレーシア	2014年
12	アルゼンチン	2014年
13	韓国	2016年、2018年、2022年
14	ペルー	2016年
15	タイ	2017年
16	シンガポール	2017年
17	インドネシア	2019年



スペイン・マドリド展 (2009年)



シンガポール展 (2017年)



神戸展 (2012年)



タイ展 (2017年)



ブラジル・サンパウロ展 (2011年)



マレーシア・クアラルンプール展 (2014年)



台湾・桃園展 (2015年)

連続公開講演会 統一テーマ

「21世紀の精神のシルクロード ——平和への道筋を考える」

- ◆講師：齋藤 元紀氏（高千穂大学教授、同大学人間科学部長）
- ◆開催日：2023年11月18日
- ◆方式：YouTube Live 限定配信
- ◆テーマ：思考の危機と危機の思考——哲学の終わりなき挑戦



講演では、東日本大震災の後、被災地での対話活動を通して得た経験を披歴。眼前の危機に対して、哲学者は何ができるのかを考えてきた。世界に起こる数々の危機は、哲学は学問の世界だけのものであるという考え方を変え、私たちにとってその必要性が再発見される状況を生んでいる。「危機」が哲学的に意味をもったのは、「歴史」への意識が芽生えて以降（近代）であるとして、専門の見地から、フッサール「学問の危機」、ハイデッガー「技術の危機」、アレント「思考の危機」という20世紀の「危機」を挙げて、21世紀における「危機」に対処するための思考を求めた。そうしたなかから、「危機」とは「愚かさ」ではなく「無思考」であることと指摘。思考をすり抜けてしまう「危機」に対して、それを自覚し、他者と語らい、絶えず挑戦を続けていくことの重要性を訴えた。

- ◆講師：岡部 芳彦氏（神戸学院大学教授、ウクライナ研究会会長）
- ◆開催日：2023年11月25日
- ◆方式：YouTube Live 限定配信
- ◆テーマ：日本とウクライナ——過去・現在・未来——



講演では、ウクライナの成り立ちや同国とロシアとの関係について言及。日本から見た時、ウクライナが「隣の隣の国」であるという事実から、日本にとって想像よりも近い国であることを述べつつ、現在起こっているロシア・ウクライナ戦争の状況を分析した。そして、ロシアのプーチン大統領とウクライナのゼレンスキー大統領が、どのような考えに基づいて行動しているのかを知ることが重要であるとして、彼らの背景にある歴史観や思想を見た時に、必ずしもメディアで言われる情報が正しいわけではなく、時に報道されてもいないということが分かったと語った。そして、日本とウクライナの交流史のなかで、1953年に北極圏で発生した「ノリリスク蜂起」は、日本人とウクライナ人の出会いと交流を見るうえで大事な出来事であり、両国の知られざる交流に目を向けることで、新たな視点を開いていきたいと望んだ。

東洋哲学研究所創立者である池田大作先生は 1983 年以來、1・26「SGI の日」を記念して平和構築への提言を 40 回にわたって発信してきた。人類が 21 世紀のシルクロードたる地理的・文化的・歴史的つながりを再認識し、共に幸福を享受し、共に平和へと歩むための方途を論じ合うこと企画した講演会には、国内外 2500 人がオンライン視聴した。

◆講 師：加藤 泰史氏（相山女学園大学教授、一橋大学名誉教授）

◆開催日：2023 年 12 月 2 日

◆方 式：YouTube Live 限定配信

◆テ ー マ：二つの戦後と「人間の尊厳」

——社会統合の新たな理念としての「尊厳」



講演では冒頭、個人化やグローバリゼーションが進行する中で、「現代社会において統合の新たな理念はそもそも何であるのか」と問いながら、社会統合の理念として「尊厳」を挙げた。そして、自身の研究プロジェクトで進める「尊厳学」の確立へ向けた研究活動を紹介。プラトンから言及されてきた「尊厳」の歴史に触れ、その「尊厳」が脅かされた二度の世界大戦下での状況を述べた。そして、「国連憲章」や「世界人権宣言」など「尊厳」の概念を人類に浸透させる歩みと、それに抗う戦争・紛争が絶えない事実を強調。災害よりもこうした人災こそが「人間の尊厳」を最大に毀損するものだという認識を深め、指導者と市民が教育などによって「尊厳ある社会」の実現への理解を深めていくべきだと訴えた。それを自覚し、他者と語り、絶えず挑戦を続けていくことの重要性を訴えた。

◆講 師：内海 友子氏（創価大学准教授）

◆開催日：2023 年 12 月 23 日

◆方 式：YouTube Live 限定配信

◆テ ー マ：誰一人取り残さない経済の創出に向けて

——開発途上国における女性のエンパワーメント



講演では、SDGs では誰一人取り残さないことを誓い、開発や環境等に関連する目標を設定しているが、重要な点は先進国も発展途上国も様々なアクターが関わり、連帯していくための大切な道筋の一つであると強調。2023 年はその中間年であったが、達成が危ぶまれる今こそ、共に取り組む必要性があると訴えた。創立者・池田 SGI 会長は、2018 年の「SGI の日」記念提言で、ジェンダー平等と女性のエンパワーメントが、他のすべての目標を大きく前進させるうえで欠かせない基軸と言及している。こうした指針を具体化しなければ、現在のペースでの目標達成は困難であると指摘した。女性リーダーや女性の活躍の認知度を高め、情報を提供していくことだけでなく、格差や差別の根源は人間の心の中にあることを自覚することが必要であり、それは教育によって変革していくことが可能であると語った。

研究部員会／研究グループ活動

研究部員会（オンラインにて開催）

- 6月20日 「日蓮の空海批判」 前川健一（研究員）
- 7月18日 「開結二経（『無量義経』・『観普賢菩薩行法経』）について」 菅野博史（副所長）
- 9月19日 「少子化の現代と女性・男性の生き方」 片岡優華（委嘱研究員）
- 10月17日 「イスラームから見たウクライナ戦争と共存への方途」 岩木秀樹（研究員）
- 11月21日 「大正期におけるリベラリストと立正安国」 大西克明（研究員）
- 12月19日 「牧口常三郎の価値哲学とそのコンテクスト——科学的教育学という構想の思想的位置づけ——（二）」 伊藤貴雄（研究員）

2024年

- 1月23日 「パレスチナは今？」 浅子清（客員研究員）
- 3月19日 「トインビーの中国文明観と『文明型国家』——『中華』『中国』の定義の変容と“Xivilization”」 満田剛（委嘱研究員）

グループ研究会

第1部門「仏教文献・仏教思想」研究

■第1グループ「仏教思想」研究（オンラインにて開催）

- 4月11日、4月25日、5月9日、6月6日、7月4日、7月25日、9月26日、11月7日、12月5日
- 『Reading of the Lotus Sutra』P29-50

■第2グループ「日蓮仏教」研究 於：東洋哲学研究所

- 7月11日 「日蓮文書の文献学的・古筆学的研究」小林正博（特任研究員）

■第1グループ・第2グループ合同研究会 於：東洋哲学研究所

2024年

- 2月17日 「パーリ文献中のadhimuttiについて」 古川洋平（研究員）
- 「大乘仏教と提婆達多」 前川健一（研究員）
- 「SGI (Soka Gakkai International) をめぐって——その両義性綜合の試み——」 三好楠二郎（委嘱研究員）

第2部門「人類的課題と思想・哲学・宗教」研究

■第3グループ「生命・科学・環境の倫理」研究（オンラインにて開催）

2024年

- 1月20日 「AGIとシンギュラリティがもたらす未来」 篠宮紀彦（創価大学教授）

■第4グループ「平和・人権・ジェンダー」研究（オンラインにて開催）

- 7月1日 「『平和・人権・ジェンダー』グループ新体制へ向けて」 大島京子（委嘱研究員）
- 「これまでの『ジェンダー』プロジェクトの活動と今後の展望」 栗原淑江（特任研究員）

2024年

- 2月17日 「池田・サーライダー対談にみる詩の力」 二宮由美（研究員）
- 「2022年ウクライナ侵攻後のロシアにおける女性運動の行方～欧米との相克をロシア・ソ連史の女性運動の変遷から考察する」 佐藤裕子（委嘱研究員）

■第6グループ「教育論」研究（オンラインにて開催）

2024年

- 2月24日 「Teaching Translation Studies in a Multilingual Classroom」 アンドリュー・ゲバート（委嘱研究員）

レクチャー／市民公開講座

「ウラジミール・ナボコフの『アーダ』における時間論と近親相姦の問題について」

寒河江光徳（委嘱研究員）

「いじめやネット問題の対策のための国際的共同研究や実践支援の近況報告」

戸田有一（委嘱研究員）

第3部門「仏教の現代的展開」

■第7グループ「宗教間・文明間対話」研究 於：東洋哲学研究所

6月27日 「一神教と聖書」 山崎達也（主任研究員）

7月11日 「井筒俊彦における空海解釈について」 山崎達也（主任研究員）

7月25日 「カトリックとプロテスタント」 山崎達也（主任研究員）

9月26日 「イエスからキリストへ①」 山崎達也（主任研究員）

2024年

1月30日 「パウロ神学」 山崎達也（主任研究員）

2月27日 「イエスからキリストへ②」 山崎達也（主任研究員）

3月26日 「受肉と十字架上の死」 山崎達也（主任研究員）

■第8グループ「文明論」研究（オンラインにて開催）

7月25日 「キューバにおけるキリスト教とナショナリズム：ヨーロッパにおける奴隷観に注目して」

井上大介（研究員）

「ファヤズテパ出土壁画と大乘仏教（法華経）」 川崎建三（委嘱研究員）

11月28日 「大乘仏教とトインビー」 石神豊（副所長）

2024年

2月27日 「日本におけるidealism の受容——井上哲次郎と大西祝」 春日潤一（委嘱研究員）

「ある研究者の思い違いの整理——法華経理解に関する論理の骨格——」

光國光七郎（委嘱研究員）

レクチャー（オンラインにて開催）

「文明論」レクチャー

6月13日 「人類文明と覇権主義——世界を見つめ歴史を綴る——」

服部英二（元国連教育科学文化機関事務局長顧問）

「社会と宗教」レクチャー

7月 1日 「文化間移動と保育者のアイデンティティ」 卜田真一郎（常磐会短期大学教授）

八王子学園都市大学「いちょう塾」

一般公開講座 於：東京・八王子市学園都市センター

4月15日 「中東とともに40年～危機の時代をよみとく～」 浅子清（客員研究員）

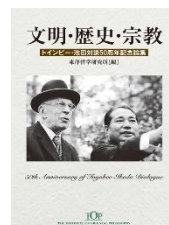
7月15日 「家来たちの鎌倉時代～新たな視点で歴史を紐解いてみよう！～」 梶川貴子（研究員）

8月12日 「インドのカレーはひと味ちがう？～共存する人々の暮らしを知ろう～」 松木園久子（委嘱研究員）

出版物

■ 『文明・歴史・宗教』

公益財団法人東洋哲学研究所編
2022年3月16日発行、定価：1,980円（税込）



■ 『日蓮の心』

公益財団法人東洋哲学研究所編
2022年11月18日発行、定価：1,500円（税込）、第三文明社刊



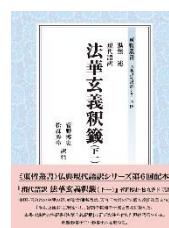
■ 『仏教東漸の道 インド・中央アジア篇』

公益財団法人東洋哲学研究所編
2023年3月20日発行、定価：4,500円（税込）



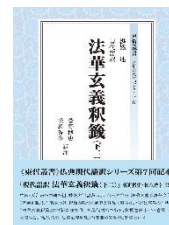
■ 『現代語訳 法華玄義釈籤（下一）』

菅野博史・松森秀幸 訳注
2022年11月18日発行、定価：7,590円（税込）



■ 『現代語訳 法華玄義釈籤（下二）』

菅野博史・松森秀幸 訳注
2023年11月18日発行、定価：7,700円（税込）



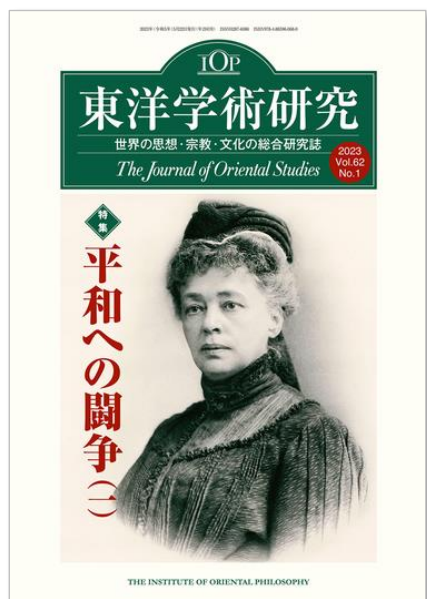
■ 『中国天台宗の戒律観の研究 明曠「天台菩薩戒疏」を中心に』

大津健一著
2024年2月4日発行、定価：14,850円（税込）



定期刊行物

東洋学術研究 第62巻 第1号 (通巻190号) 定価：1,400円 (税込)

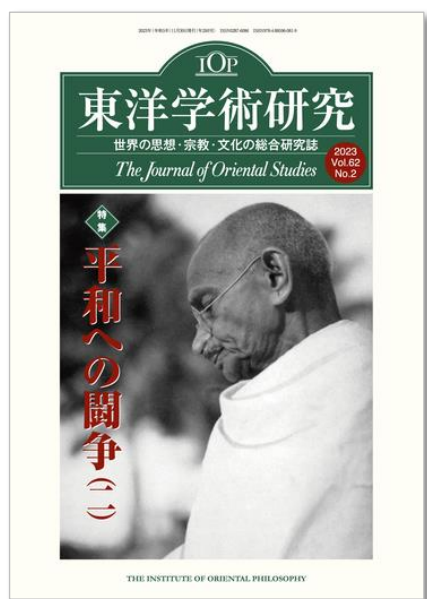


- 『東洋学術研究』第62巻第1号の特集1「平和への闘争」シリーズ(1)として、特別てい談「平和への闘争——危機の時代を乗り越える哲学と対話——」などを掲載。さらに、連続公開講演会「地球的危機の『挑戦』と宗教・文明の『応戦』——パンデミックを契機として」の講演録を収録している。
- 「近代日本における価値哲学者の群像」の最終回、「激動の時代を生き残った人と思想」①アフマッド・シャー・マスード、コラム、寄稿、新刊紹介などを収録。表紙写真は、作家・平和運動家として活躍したオーストリアのベルタ・フォン・ズットナー(1843-1914)。

主な内容

- 【特集1】平和への闘争(1)
特別てい談 平和への闘争——危機の時代を乗り越える哲学と対話——
新井立志(ケント州立大学准教授)、尾形哲史(アメリカ創価大学地球的問題群研究センター長)、中山雅司(委嘱研究員)
寄稿 ロシアという名のミメシス的な主体について——ドストエフスキーをめぐるポリフォニー、ユーラシア主義など——
.....寒河江光徳(委嘱研究員)
- 【特集2】地球的危機の「挑戦」と宗教・文明の「応戦」——パンデミックを契機として(連続公開講演会より)
疫病・紛争・飢饉に対する宗教の課題と役割——『二十一世紀への対話』を題材として——
.....井上大介(研究員)
人類の文明と文化再考.....鈴木董(東京大学名誉教授)
イスラームとの対話から見る共生——世界宗教の視座から——.....子島進(東洋大学教授)
ベルタ・フォン・ズットナーの文学と平和運動——トインビー・池田対談の視点を交えて——
.....糸井川修(愛知学院大学教授)
- 研究覚え書き
平和創出とNGOの草の根活動.....大島京子(委嘱研究員)
自己・社会・環境の三つの範疇の関係——多様性の調和による統合の原理に学ぶ——
.....光國光七郎(委嘱研究員)

東洋学術研究 第62巻 第2号 (通巻191号) 定価：1,400円(税)



- 『東洋学術研究』第62巻第1号に引き続き特集「平和への闘争」第2弾を掲載。益々深刻化する環境問題や戦争などの複雑で多様化する地球的課題に対し、人類としてどう向き合うべきかを、国際法の枠組、歴史、宗教、福祉の観点を通じ考察する論文や講演録を掲載。
- 「激動の時代を生きた人と思想」では、ナチス・ドイツ時代を生きた政治哲学者ハンナ・アーレントを取り上げる。哲学者の森一郎氏が、アーレント『革命論』から見出す現代日本の政治哲学の可能性を論じる。そして、特別てい談「東洋哲学の現在——始原とは何か」では、斎藤慶典、安藤礼二、山崎達也の三氏が『東洋学術研究』第60巻第2号(2021年11月発刊)で掲載したてい談「東洋哲学とは何か」に引き続き、東洋哲学の再検討をめぐる議論を紹介。そのほか、コラム、寄稿、研究覚え書きを収める。

主な内容

■特集 平和への闘争(2)

【特別寄稿】

公正な不戦世界を目指して——ガンジーにみる非暴力と不殺生のグローバルな変革——

..... ニーラカンタ・ラダクリシュナン (ガンジー研究評議会議長)
地球を守り平和的共生をめざす——人新世はなぜ重要か..... サティッシュ・M・クマール (海外研究員)

【「文明論」レクチャーより】

人類文明と覇権主義——世界を見つめ歴史を綴る——..... 服部英二 (元国連教育科学文化機関事務局長顧問)

【第37回学術大会シンポジウムより】

国際公共財としての国際法と宗教——ロシアのウクライナ侵略への諸国家の対応とビートル海峡危機におけるローマ教皇庁の仲介をめぐる——..... 中谷和弘 (東京大学大学院教授)

二十一世紀の戦争、平和、尊厳..... 峯陽一 (同志社大学教授)

「戦争」を乗り越える人間の創造性——池田 SGI 会長の平和提言に学ぶ——

..... 玉井秀樹 (委嘱研究員)

幸福平和学の試み——戦争に抗う福祉的安全保障——..... 岩木秀樹 (研究員)

パネルディスカッションおよび質疑応答

■研究覚え書き

最高裁の「違憲判決」..... 山田隆司 (委嘱研究員)

定期刊行物

The Journal of Oriental Studies vol. 33 定価：2,000円（税込）



Main Articles

Together with the Founder: An Institute with a Global Mission.....Akira Kirigaya

Feature 1: A Struggle for Peace

Gandhi and Global Nonviolent and Nonkilling Transformation Toward a Just World without War.....Neelakanta Radhakrishnan

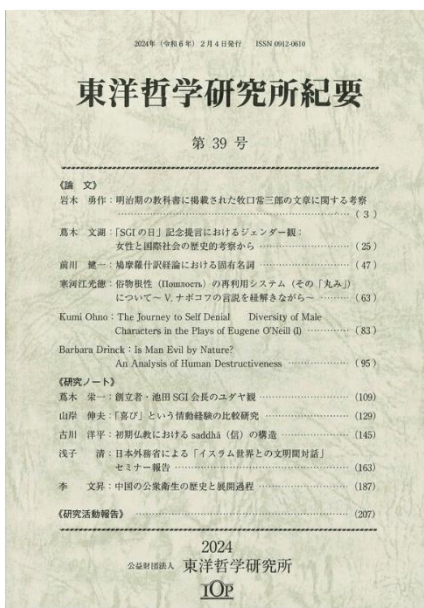
Anthropocene Chronicles: Preserving Earth's Equilibrium for Coherent Coexistence.....M. Satish Kumar

Civilization and Hegemonism: Writing History through the Lens of the World.....Eiji Hattori
International Law and Religion as 'International Public Goods': A Study of the Responses to the Russian Aggression against Ukraine and the Mediation by the Vatican in the Beagle Channel Crisis.....Kazuhiro Nakatani

War, Peace, and Dignity in the 21st Century.....Yoichi Mine
Human Creativity to Overcome 'War'—Learning from SGI President Ikeda's Peace Proposals.....Hideki Tamai

Well-being Peace Studies: Welfare Security against War.....Hideki Iwaki

東洋哲学研究所紀要 第39号 (非売品)



《論文》

■明治期の教科書に掲載された牧口常三郎の文章に関する考察.....岩木勇作（研究員）

■「SGIの日」記念提言におけるジェンダー観：女性と国際社会の歴史的考察から.....薫木文湖（委嘱研究員）

■鳩摩羅什訳経論における固有名詞.....前川健一（研究員）

■俗物根性（Пошлость）の再利用システム（その「丸み」）について～V. ナボコフの言説を紐解きながら～.....寒河江光徳（委嘱研究員）

■The Journey to Self Denial
Diversity of Male Characters in the Plays of Eugene O'Neill (I)
.....Kumi Ohno（委嘱研究員）

■Is Man Evil by Nature?
An Analysis of Human Destructiveness.....Barbara Drinck（海外研究員）

《研究ノート》

■創立者・池田SGI会長のユダヤ観.....薫木栄一（委嘱研究員）

■「喜び」という情動経験の比較研究.....山岸伸夫（委嘱研究員）

■初期仏教におけるsaddhā（信）の構造.....古川洋平（研究員）

■日本外務省による「イスラム世界との文明間対話」セミナー報告.....浅子清（客員研究員）

■中国の公衆衛生の歴史と展開過程.....李文昇（委嘱研究員）

《研究活動報告》



公益財団法人東洋哲学研究所

THE INSTITUTE OF ORIENTAL PHILOSOPHY